

4 流域の文化

(1) 水戸藩と文化形成

那珂川下流域は江戸時代水戸藩 260 年間の支配下のもとで領地の開発が進み、人口増加と共に地域文化が形成されていった。初代藩主頼房よりふさの代の水戸城・城下町の建設、2代藩主光圀みつくにの代の辰ノ口堰たつのくち（久慈川）、岩崎堰いわさき（久慈川）、小場江堰おぼえ（那珂川）の三大江堰えぞきの建設による水利土木事業、笠原水道の敷設、柳堤の建設等がある。また、「大日本史編纂事業」を着手し、全国から多くの学者を招いている。光圀の学問への精神は、水戸藩代々受け継がれ、9代藩主斉昭なりあきの代に開花した。

古代泳法の一つである「水府流」は、初代藩主頼房、2代藩主光圀以来、水戸藩が弘道館武術の一つとして藩士に奨励したのがその発祥で、その泳法は那珂川しゅうりんで修練された。今日でも年1回水府流による競泳大会が開かれている。

(2) 流域の社寺と信仰

わが国では古代より偉大なる自然や人物を敬い神格化してきた。栃木・茨城県境の鷲子山頂とりこのには、この地方で発生した疫病で多くの死者が出たのを鎮めるため、大同2年（807）創建された鷲子山上神社とりこのさんしやうじんじや（常陸大宮市・那珂川町）がある。その他海神を祀り、海難防除・大漁を祈った大洗磯前神社おほいそまへじんじや（大洗町）、酒列磯前神社さかづらいそまへじんじや（ひたちなか市）や仁徳天皇にんとくてんのう（313～399年）時代の創建で日本武尊を祭神とする那須神社（大田原市）、吉田神社（水戸市）、五穀ごこく豊穰ほうじやう・商売繁盛を祀願する笠間稲荷神社（笠間市）、養蚕・機織、産業の神として信仰された静神社しずじんじや（那珂市）などがある。なお、那珂川流域には常陸の国一宮である鹿島神宮や下総国の一宮である香取神宮かんとくじやうを勧請した鹿島神社、香取神社などが多い。

彰考館跡と大日本史

彰考館は、水戸藩第二代藩主徳川光圀が、明暦3年（1657）、『大日本史』のために江戸の水戸藩駒込邸内に創設した史局が始まりである。寛文十二年（1672）に史局を小石川の藩邸に移したのを機に彰考館と命名した。

光圀が西山荘せいざんそう（常陸太田市）に隠居したため、元禄11年（1698）に、彰考館は現在の水戸市立第二中学校がある場所に移された。光圀が没した後、130年間は江戸・水戸の両館に分かれて分担編集された。幕末に再びこの地に戻り、明治維新後は偕楽園南隅に移り、明治39年（1906）に『大日本史』全てが完成した。

『大日本史』は神武天皇から南北朝が統一された1392年（元中9年/明徳3年）までの百代の帝王の治世を紀伝体で記した日本の歴史書で、十代藩主慶篤よしあつの孫にあたる徳川圀順が完成させるまで実に250年の歳月を要し（ただし、本紀・列伝は光圀存命中にはほぼ完成しており、幕末以後何度か刊行されている）、全397巻、目録5巻を編纂した大事業であった。



（水戸市立第二中学校 平成17年6月）

図 2-24 大日本史編纂の地の碑

(3) 祭り・行事

① 山あげ祭

那須烏山市（旧烏山町）の「山あげ祭」は、八雲神社^{れいたいさい ほうのう}例大祭の奉納行事で、400年以上の歴史をもつ。現在毎年7月に、6町内が持ち回りで当番となり、特産の程村紙^{ほどむら}を、竹の網代の上に幾重にも貼りつけてできた「山」と呼ばれる山車^{だし}があげられ、その前で歌舞伎、狂言等が演じられ、場面ごとに木頭^{きがしら}（指揮者）の拍子木^{ひょうしぎ}を合図に様々に変化する仕掛けと、「将門」「辰橋」などの踊りがくりひろげられる。全国でも類例のないこの祭礼は、昭和54年に国の重要無形民俗文化財に指定された。



図 2-25 山あげ祭（那須烏山市）（平成 17 年 7 月）

② その他民俗芸能

那珂川下流域の民俗芸能で代表的なものに五穀豊穡、疫病除去等のために行われる棒ささら*がある。獅子3頭を使用して棒で練りながら演じるもので、水戸・石岡地区に集中する。大串ささら（水戸市大串の稲荷神社の秋例祭に奉納・茨城県指定無形民俗文化財）、向井町ささら（水戸市の別雷皇太神社^{べつらいこうたいじんじや}＝雷神様に奉納）や平磯ささら（ひたちなか市の平磯三社祭りで行われる）、ひたちなか市天満宮^{あまのみつ}八朔祭^{はつまつり}で行われているささら等が知られている。



（写真：水戸市教育委員会）

図 2-26 大串ささら（水戸市）



（写真：鹿志村保男氏）

図 2-27 天満宮御祭礼の六丁目獅子（ひたちなか市）

*ささら

獅子頭^{ししづめ}を被った3人の舞手^{はやし}がお囃子^{はやし}に合わせて舞う民俗芸能である。「獅子舞」とも呼ばれ、それぞれに個性をもったささら・獅子舞が各地の祭礼で奉納される